

マルクス・エンゲルス選集

第十七卷

ロシア・ツァーリズムの対外政策

法学者社会主義

エルフルト綱領草案批判

国際社会主義運動

マルクス=エンゲルス選集

第 17 卷

マルクス・レーニン主義研究所編

國際社會主義運動

大月書店刊

マルクス＝エンゲルス選集

一九五四年十一月十五日 發行

第十七卷

定価 四二〇円

編集者

マルクス・レーニン主義研究所

発行者

東京都文京区本郷一丁目一五番地
小林直衛

印刷者

東京都文京区柳町二六番地
三晃印刷株式会社



發行所

東京都文京区
本郷一丁目一五番地

大月書店

電話 小石川(92) 三〇九一
七八八七番
振替・東京 一六三八七番

三晃印刷・田中製本

凡 例

一 原註は（原註1）と、異文考証等についての編集者（訳者）による註は*印で標示し、その註釈文はそれぞれ註を必要とする個所の直後に、訳者による註は（1）（2）等と標示し、その註釈文は（註1）（註2）等として各論文、手紙の末尾に一括し、なお簡単な訳註は（……）として六号活字で本文中に挿入した。原文にある挿入句は（……）で挿入した。

二 原文で一般的に使用されている國語以外の原語は、原則としてその訳語の直後に（……）で挿入した。

三 引用文は「……」で、引用文中の再引用箇所は『……』でしめた。

四 著書、新聞、雜誌その他の出版物の書誌名または著作題名等は『……』でしめた。

五 原文中斜字体または隔字体（イタリック）になった個所は、訳文ではゴチック活字または傍点をつけて標示した。

六 地名、人名はなるべく現地の発音にちかく表記することを原則としたが、從來の慣用をも考慮した。

七 手紙は主題に関係ある部分の抄訳にとどめ、文調も手紙であることに格別の考慮をはらっていない。

八 本選集の訳文は、それぞれの訳者が担当し、校訂者によって原典と各國語訳とを逐語的に参照し、内容上と用語用上との校訂がなされ、文調にも一應の統一がはかられたうえ、なったものである。

目 次 第十七卷

マルクスの死（エンゲルス）

マルクスの送葬にあたって	一
カール・マルクスの死について	五
ゾルゲへの手紙（一八八三年三月十五日午後十一時四十五分）	二〇
ハインリヒ・カール・マルクス	二五

資本主義の新段階——將來の世界戦争（エンゲルス）

ヨーロッパの政治情勢	四一
パリ國際祝日組織委員会への手紙	五四
ボルクハイム著『ドイツの熱狂的愛國者たちの 記憶を喚起する——一八〇六—七年』への序文	五七
ロシア・ツァーリズムの對外政策	六一

ヨーロッパは軍備を撤廃しうるか……………一〇

取引所——『資本論』第三卷補遺……………一四四

付　　ベルへの手紙（一八九二年一月二十四日）……………一四七

未來の共同社会について……………一四九

第二インタナシヨナル（エンゲルス）

『パリ大会のための闘争』

一　ゾルゲへの手紙（一八八九年六月八日）……………一五一

二　ゾルゲへの手紙（一八八九年七月十七日）……………一五六

三　ゾルゲへの手紙（一八八九年七月二十日）……………一五八

ホシビリストの信任狀……………一六三

『ブリュッセル大会への準備活動』

一　ゾルゲへの手紙（一八九〇年九月二十七日）……………一六七

二　ゾルゲへの手紙（一八九〇年十一月二十六日）……………一六九

『ブリュッセル大会とヨーロッパの情勢』

ラファルグへの手紙（一八九一年九月二日）……………一七一

チューリヒ大会における閉会演説——一八九三年九月——……………一七六

イギリス (エンゲルス)

〔イギリス労働者の政治的無力〕

ペーベルへの手紙 (一八八三年八月三十日)……………一七九

一八四五年と一八八五年のイギリス……………一八二

〔宗派的組織と大衆の覚醒〕

一 ペーベルへの手紙 (一八八六年八月十八日)……………一九一

二 ゴルゲへの手紙 (一八八七年五月四日)……………一九二

三 ゴルゲへの手紙 (一八八九年十二月七日)……………一九三

四 ゴルゲへの手紙 (一八九〇年四月十九日)……………一九五

ブルジョアジーの隠退……………一九八

ロンドンの五月四日……………二〇五

〔フェビアン協会について〕

カウツキーへの手紙 (一八九二年九月四日)……………二一四

〔独立労働党と社会民主連盟、フェビアン協会〕

一	ゾルゲへの手紙 (一八九三年一月十八日).....	二八
二	ゾルゲへの手紙 (一八九三年三月十八日).....	三二

ロ シ ア (エンゲルス)

ツ	アーリ・ロシアの眞の秘密のダイナマイト顧問.....	三三
---	----------------------------	----

フ ラ ン ス (エンゲルス)

〔ごたまぜ社会主義〕

ベ	ーベルへの手紙 (一八八五年十月二十八日).....	三七
---	----------------------------	----

〔急進派からの独立〕

一	ラファルグへの手紙 (一八八六年二月十六日).....	三二
二	ラファルグへの手紙 (一八八六年五月七日).....	三三

〔妥協の限度〕

ラ	ファルグへの手紙 (一八八七年十一月二十二日).....	三六
---	------------------------------	----

〔ブルジョア諸政派との闘争〕

ラ	ファルグへの手紙 (一八八七年十二月五日).....	三七
---	----------------------------	----

〔小ブルジョアの知識分子について〕

ラファエルグへの手紙（一八九〇年十月二十七日）……………

二三八

〔ブルジョア共和國終焉のはじまり〕

ゾルゲへの手紙（一八九二年十二月三十一日）……………

二三九

〔共和制について〕

ラファエルグへの手紙（一八九四年三月六日）……………

二四一

〔労働党の革命化〕

ラファエルグへの手紙（一八九四年六月二日）……………

二四二

〔社会主義者の打算結婚〕

アドラーへの手紙（一八九四年七月十七日）……………

二四三

〔革命の平和的手段について〕

ラファエルグへの手紙（一八九五年四月三日）……………

二四八

アメリカ（エンゲルス）

〔労働者階級の初登場〕

ウィシユネウエツキー夫人への手紙（一八八六年六月三日）……………

二四九

〔社会主義者当面の任務〕

一 ゴルゲへの手紙（一八八六年十一月二十九日）……………二五二

二 ウィッシュネウエツキー夫人への手紙（一八八六年十二月二十八日）……………二五四

三 ウィッシュネウエツキー夫人への手紙（一八八七年一月二十七日）……………二五六

〔第三党の可能性〕

ゴルゲへの手紙（一八九二年一月六日）……………二五九

〔アメリカ労働者の特殊地位〕

シュリユーターへの手紙（一八九二年三月三十日）……………二六一

アメリカの大統領選挙……………

〔思想的後進性の物質的基礎〕

ゴルゲへの手紙（一八九二年十二月三十一日）……………二六八

〔選挙戦術について〕

ゴルゲへの手紙（一八九三年三月十八日）……………二七〇

〔運動の一時的衰退〕

ゴルゲへの手紙（一八九五年一月十六日）……………二七二

ド イ ツ (エンゲルス)

ドイツ社会民主党にかんする手紙から 一

——右翼日和見主義との闘争(一八八三—一八八七年)——

一	ベルンシュタインへの手紙(一八八三年六月十二日).....	二七五
二	ベルンシュタインへの手紙(一八八三年八月二十七日).....	二八〇
三	ベッカーへの手紙(一八八四年二月十四日).....	二八一
四	ベルンシュタインへの手紙(一八八四年三月二十四日).....	二八三
五	ベルンシュタインへの手紙(一八八四年六月五日).....	二八五
六	ペーベルへの手紙(一八八四年十月十一日).....	二八七
七	ペーベルへの手紙(一八八四年十一月十八日).....	二九〇
八	ペーベルへの手紙(一八八四年十二月十一日).....	二九五
九	ペーベルへの手紙(一八八四年十二月三十日).....	三〇一
一〇	ゾルゲへの手紙(一八八五年六月三日).....	三〇四
一一	ペーベルへの手紙(一八八五年六月二十二日).....	三〇四
一二	ゾルゲへの手紙(一八八七年三月三日).....	三〇六

法学者社会主義 三〇八

さてどうするか 三四〇

反ユダヤ主義についての手紙（一八九〇年四月十九日） 三四六

『ゾツィアルデモクラート』終刊号によせて 三五〇

ドイツ社会民主党にかんする手紙から 二

——左翼日和見主義との闘争（一八九〇—九二年）——

一 シュミットへの手紙（一八九〇年四月十二日） 三五五

二 ゴルゲへの手紙（一八九〇年八月九日） 三五七

三 『ゼクシツシェ・アルバイターツァイトウング』

編集部員への回答（一八九〇年九月七日） 三六九

四 パウル・エルンスト氏への回答（一八九〇年十月一日） 三六三

五 シュミットへの手紙（一八九二年二月四日） 三七一

六 シュミットへの手紙（一八九二年九月十二日） 三七二

一八九一年の社会民主党「エルフルト」綱領草案の批判 三七五

付 カウツキーへの手紙（一八九一年十月十四日） 三九六

ドイツにおける社会主義 三九九

付 〔社会民主党と戦争問題〕

一 ベーベルへの手紙（一八八五年十一月十七日） 四一九

二 ベーベルへの手紙（一八八六年九月十三日） 四二一

三 ベーベルへの手紙（一八九一年九月二十九日） 四二三

四 ベーベルへの手紙（一八九一年十月二十四日） 四二五

フランスとドイツの農民問題 四二八

付 〔農民問題における右翼日和見主義〕

一 ゴルゲへの手紙（一八九四年十一月十日） 四三七

二 『フォルヴェルツ』編集部への手紙（一八九四年十一月十二日） 四五八

三 ゴルゲへの手紙（一八九四年十二月四日） 四六〇

四 ベーベルへの手紙（一八九五年一月三日） 四六二

オーストリア（エンゲルス）

ウィーン党大会によせて（一八九一年六月二十六日） 四六三

ウィーンのオーストリア党大会へ（一八九二年五月三十一日）……………四六五

〔当面の諸問題〕

アドラーへの手紙（一八九二年八月三十日）……………四六六

オーストリアの五月祭によせて（一八九三年）……………四六九

ウィーンでの演説（一八九三年九月十四日）……………四七一

〔選挙権獲得運動〕

アドラーへの手紙（一八九三年十月十一日）……………四七三

〔政治的総罷業について〕

カウツキーへの手紙（一八九三年十一月三日）……………四七八

オーストリア党大会へ（一八九四年五月二十二日）……………四八一

〔オーストリア党の國際的使命〕

アドラーへの手紙（一八九四年七月十七日）……………四八三

イ タ リ ア (エンゲルス)

イタリアの詐欺事件について 四八五

〔將來のイタリア革命と社会民主党〕

トウラティへの手紙(一八九四年一月二十六日) 四九八

〔イタリアの最後のことば〕

『リスコッサ』編集部への手紙(一八九四年九月二十六日) 五〇五

〔國際社会主義とイタリア社会主義〕

『クリティカ・ソツィアル』編集部への手紙(一八九四年十月二十七日) 五〇七

マルクスの死

マルクスの送葬にあたって

——『ゾツィアルデモクラート』

一八八三年三月二十二日号所載——

現代最大の思想家が考えることをやめたのは、三月十四日午後三時十五分まえであった。二分間たらずしか一人にしておかなかったのに、私たちが部屋の中にはいつてみると、彼は安樂椅子のなかでしずかに——だが永久に、ねむりこんでいた。

ヨーロッパとアメリカの戦闘的プロレタリアートが、また歴史科学が、この人とともにうしなつたもの、それははかりしれないものである。この巨人の死によってあけられた間隙は、まもなくはつきり感じられるようにな

るであらう。

ダーウィンが生物学の発展法則を発見したように、マルクスは人間の歴史の発展法則を発見した。それはしげりすぎたイデオロギーの繁茂のもとにおおわれていた簡単な事実である。すなわち、人間は政治や科学や芸術や宗教などを研究できるまえに、まず食い、飲み、住み、着物をきなければならない、したがって、直接的な物質的生活手段の生産と、それとともに、ある國民またはある時代のそのときどきの経済的發展段階が土台をなし、その土台から人々の國家制度や法律思想、芸術や、また宗教的觀念さえも、發展したし、したがって、これらのものもまたここ〔この土台〕から説明されなければならない、これまでのようにその逆に説明されてはならないということ、これである。

それだけではない。マルクスは、こんにちの資本主義生産様式とそれによってみだされたブルジョア社会との特異な運動法則をも発見した。剰余價值の発見とともに、この分野には突然光明がさしこんできた。これまでのいっさいの研究は、ブルジョア經濟學者のものも社会主義的批判家のものも、暗闇のなかにさまよっていたのである。

一生にこのような発見を二つもすればじゅうぶんであつたらう。さいわいにもこのような発見を一つでもなしえたものは、それだけで幸福である。だが、マルクスが研究したそれぞれ分野——しかもこの分野はきわめて多く、また彼が表面的にしかふれなかつたようなものは一つもなかつた——、この個々の分野で、いな数学の分野でさえ、彼は独自のものもろの発見をしているのである。

科學者としては以上のようであつた。だが、以上はまだまだ、この人の半分にもならない。マルクスにとって